# A brief history of the Japan-Mongolia joint expedition in Eastern Mongolia: Purpose and prospect until the excavation at the Ikh Bulagiin Öndör Dovjoo site, Sukhbaatar province, Mongolia


| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2021-12-16<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: OSAWA, Takashi<br>メールアドレス:<br>所属: |
| --- | --- |
| URL | https://doi.org/10.24517/00064494 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 東部モンゴルでの蒙日共同考古学調査の歩みとイフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡発掘の目的と展望

大澤　孝
（大阪大学外国語学部）

## Ⅰ．はじめに

イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡の発掘調査内容を報告するにあたって、まず、何故に本地域の調査を実施するに至ったのか、これまでの調査の経緯および経過について、概観しておきたい。

## Ⅱ．冷戦終結と調査の開始

周知のごとく、1991 年のソ連崩壊後、民主化したモンゴル国へは、これまで立ち入りが許されなかった西側諸国の研究者がモンゴル国の調査研究機関との共同調査を条件に立ち入ることが許された。このような研究環境の変化のもと、日本からは、読売新聞社がスポンサーとなって、モンゴル帝国創始者の「チンギス・カンの墓を探す」という「三河（ゴルワン・ゴル）調査計画」が計画された。考古学者の加藤晋平教授および白石典之氏らがモンゴル科学アカデミー歴史研究所と共同して、東部モンゴルで中世遺跡を中心とした考古学調査が実施された [Mongolian academy of sciences, The yomiuri shinbun 1991; 1994]。この調査は東部モンゴル地域の青銅器時代からモンゴル帝国時代までの考古遺跡・遺物について新知見をもたらし、またその後も引き続き、今日まで発掘調査を実施し、「チンギス・カンのオルド」であるアウラガ遺跡などの発掘を通して、貴重な成果を挙げている。

その後、文献学および歴史学の分野では、1996 年から当時大阪大学文学部であった森安孝夫教授や大阪国際大学の松田孝一教授を始めとする文献学・歴史学研究者が同アカデミー歴史研究所と学術協定を締結し、モンゴル高原における突厥・ウイグル、モンゴル帝国期における碑文・遺跡に関する文献学的・歴史学的調査研究を行った。同調査隊は、碑文遺跡の計測作業、鮮明な写真や拓本による文字の再現作業を実施し、従来の読みや解釈を訂正し、不明な箇所に関しても新たな読みや解釈を提示することに成功した。その成果は『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』[ 森安・オチル編 1999] として、今日でも斯界の重要な成果として評価され、各国の研究者からも常に参照されてきている。

## Ⅲ．東部モンゴルの突厥・ウイグル時代の遺跡調査

今回の日本側代表者である大澤も、上記の 1996 年の調査団の一員として現地調査に加わって調査を担当した経験を基に、その後も引き続き、科学研究費基盤 C や民間機関からの助成金を得つつ、鈴木宏節氏などと共に突厥・ウイグル時代の碑文・遺跡の共同調査に従事してきた。特に、大澤は 2013 年 4 月から 9 月末まで半年間、勤務先大学のサバティカル制度を利用して、モンゴル国科学アカデミー考古学研究所に客員研究員として所属し、これまで突厥・ウイグル時代の専門家があまり注目してこなかったヘンティー県（アイマク）、スフバートル県（アイマク）などの東部モンゴル地域に所在する碑文・遺跡の調査を行い、いくつもの新たな知見を得た。

そもそもこれまでの突厥やウイグル時代の研究状況からすれば、彼らの君主や支配層に関わる墓廟や祭祀遺構、都市遺跡などはハンガイ山脈のオルホン河流域を中心として、西はアルタイ山脈周辺、そして東方では現在のウランバートル東南に位置するトニュクク碑文遺跡がその東限と見なされていたからである ( 図 1)。このことは突厥・ウイグル時代に関する漢籍史料や現地語碑文などの記載の少なさからもうかがえ、そのため突厥・ウイグル族の東部モンゴル高原の活動状況に関しては実態不明とされ、取り扱われることが極めて僅少であった。調査事例がない事もあり、当該期に属する碑文類もヘンティー県（アイマク）に 2 例ほどの短い岸壁銘文を挙げうるのみで、当該時代の専門家がこの地方に入って調査した事例は稀であった。

こうした状況下で、スフバートル県（アイマク）トゥブシンシレー郡（ソム）の高台草原に位置するドンゴイン・シレーはこれまで同地域では未発見の石碑を含むというだけ

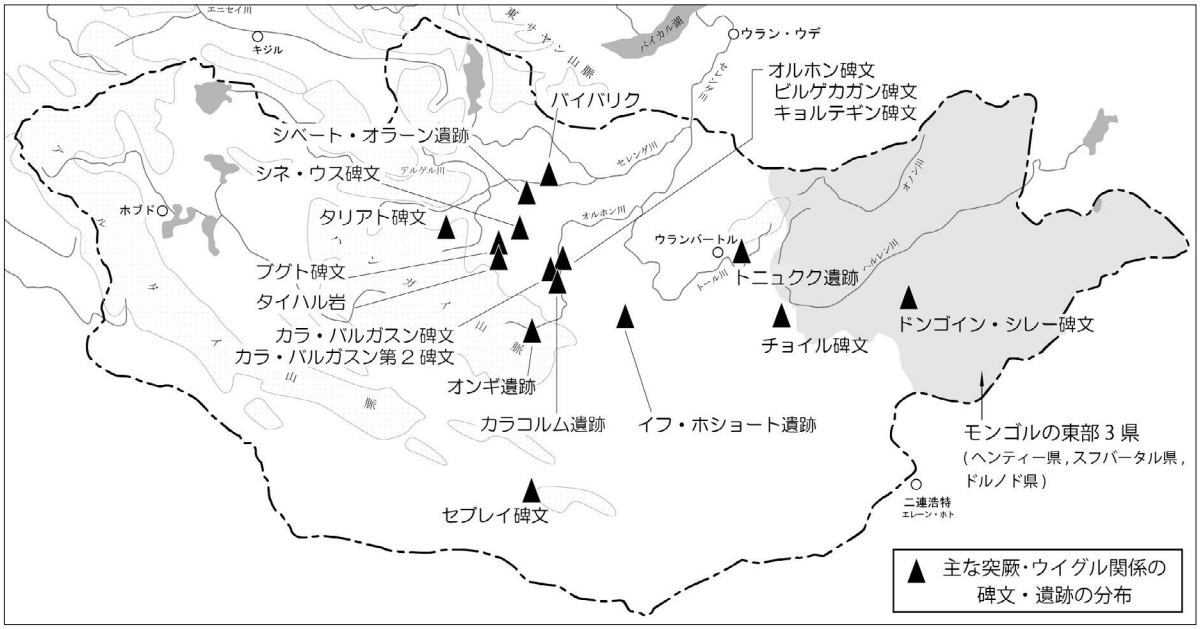


**図１　モンゴル高原の主な突厥・ウイグルのトルコ文字碑文・遺跡**

でなく、その遺構も西部モンゴルには見られない特有の形状を示していること、地政学的観点からみても、本遺跡は後のモンゴル帝国時代の大都から上都を経てヘルレン河に出て、カラコルムに至るテルゲン（車）道の街道沿いに位置し、当時の大興安嶺山脈を越えて西方へ進出しつつあったモンゴル系の九姓韃靼（タタール）族やその南東に位置する契丹族や契族、南方方面では唐軍と対峙する上で、重要な戦略拠点として機能していたことが看取された。

そこで大澤は改めて、本碑文遺跡のモンゴル考古学研究所との共同調査をおこなうため、モンゴル考古学研究所と学術協定を締結し、「東部モンゴル新発見の突厥碑文調査と遺跡保護に関する歴史考古学的研究」( 文部省科学研究費補助金基盤 A、代表 : 大澤孝、2014~2017 年 ) と題する共同プロジェクトを発足させた。最初の 2014 年には、斉藤茂雄氏らと同碑文遺跡を含む周辺地区での碑文・遺跡の表面調査を実施した。その際には既に、今回の発掘対象となったイフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡を訪れる機会も得た。そして、2015 年から 2017 年まで上記のドンゴイン・シレー碑文遺跡の本格的な発掘作業を実施し、囲郭マウンドとそこに立てられていた碑文の調査を行なった。

## Ⅳ．ドンゴイン・シレ―の発掘調査の概要

当初、大澤は本遺跡を 2013 年 5 月 29 ～ 30 日に訪問し、文字の存在を確認した。その後、モンゴル文化庁に緊急申請を行い、6 月 5 ～ 10 日にはモンゴル考古学研究所と一部域の試掘調査を実施し、その成果についてウランバートルでモンゴル考古学研究所側と共同で記者発表会を実施し、また帰国後にも大阪大学でも記者発表会を行った。

なお、2013 年 5 月当時には、遺跡はモンゴル時代の墓に見られるような環状積石墓のような形状で、突厥時代に特有の方形石囲いのようなものではなかった。環状の盛り土の内部マウンドの東側の地上には 2 つの石碑断片が、また真ん中付近にはところどころに石柱断片が地表に突き出して半分まで土砂に覆われて横たわっているのが見て取れた。この他には環状遺跡の南東には本来は遺跡の中央部に安置されていた大型石槨の断片で、花柄文様をもつ一片が放置されていた。5 月 30 日の朝、いままで文字らしきものが全く見当たらなかった第 2 の長石の側面にたまたま光が当たっていた際、解読出来るレベルにはないものの、なにやらごつごつした表面に文字らしき痕跡が認められた。おそらく石碑調査に長年慣れた専門家でなければ、そこに文字があるとは気付かぬレベルのものである。なお、大澤は後日、モンゴル考古学研究所の Ts. ボロルバト氏から知らされた事ではあるが、2002 年～ 2010 年に東部モンゴル地方の青銅器やモンゴル時代の遺跡を中心に古代遺跡の調査を実施したモンゴル国立大学の考古学・人類学教室の D. トゥメン教授らの調査

グループが 2008 年に同地を訪れていたとのことである。その報告には明確に文字があるとは断言してはいないということで、その後も何ら調査もなされてはおらず、また突厥時代の専門家にも知らされなぬまま我々の調査まで放置されていた事からも、どうやらこの石碑に文字があることを疑っていたようである。

2013 年 9 月 24 日～ 10 月 1 日に科学アカデミー考古学研究所によるランダムな試掘調査のあと、2015 年から 2018 年まで日本・モンゴル共同発掘調査によって調査を実施した。方形に土手で囲繞された周構の中に方形のマウンドがあったこと、その真ん中に大型の石槨がおかれていたことが明らかとなった ( 図 2)。そしてそのマウンドからは、当初から地中に露出していた 2 本の石碑のほか、地中から、復元すると本来は全長 4 ～ 7 m ほどの長さをもつ 11 本の石碑が 3 ～ 5 片ほどに切断され、1 本は完全にばらばらに裁断された石碑が新たに掘り出された。また 2016 年の調査では、石碑に囲まれていた方形遺構中央に安置されていた石槨もばらばらに破壊されて中央の約 7m の深さの穴 ( 直径は約 1m ほど ) に投げ込まれていた。盗掘されたか、破壊されたのであろうが、我々がここを訪れた当初、石碑は文字やタムガのある表面が隠されて裏返されていたことから、現地の牧民が破壊された石碑を地中に埋めてこれ以上破壊されないように保護したと見ることは可能であろう。また、No. 8 の石碑表面には契丹文字の墨書銘文が縦型に刻まれていたことからすれば、本石碑は少なくとも契丹小字が使用された西暦 11 世紀段階ではまだここに建てられていたと見なす事ができる。その後、ここを訪れた何者かによって石碑群は破壊されたのであろうが、その後、ここを訪れた現地遊牧民がマウンド上に放置されてあった石碑や遺物断片を、先祖の霊魂の宿る廟于として信仰し、これらを保護すべく、土砂を被せたり、地中に埋めたと解せよう。

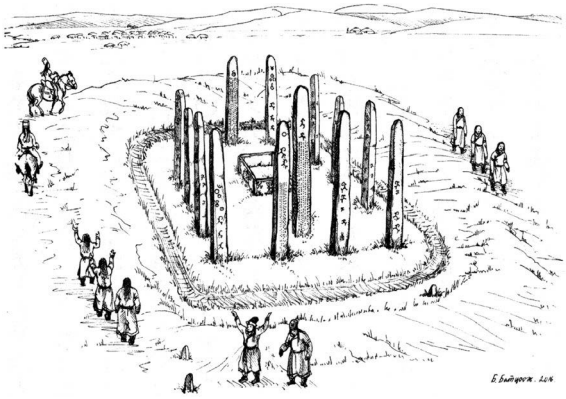

**図 2　ドンゴイン・シレー碑文遺跡の推定復元図**
**（モンゴル科学アカデミー考古学研究所提供）**

このことを裏付ける史料として、明朝の第 2 代永楽帝に随従した金幼孜（きんようし）は 1402 年に北京から、上都、そしてヘルレン河に至るテルゲン ( 車 ) 道を経てモンゴル高原の諸部族の征服に赴いた際の日記には 4 月 27 日に「古梵場」に到着し、一泊の後、翌 28 日にここを出発した記載が挙げられる。その後、永楽帝の軍隊一行は、5 月 30 日には順安鎮という宿駅を通過し、途中の高山から臚朐河 ( 今日のヘルレン河 ) を一瞥した事を記す [1]。

本史料の記載と現地の景観を比較して当時のテルゲン道の行路の復元を試みた白石典之氏によれば、この「古梵場」がドンゴイン・シレーもしくはその周辺の遺跡を指す可能性があるという [ 白石 2017]。以下は大澤の考察であるが、一般に「梵」は仏教に関わる字句であることから、金幼孜はこの場所にかつての仏寺の痕跡を認めていたことになる。

しかし、1402 年当時ドンゴイン・シレー遺跡もしくはその周辺に既に仏寺が存在していたとみなす事は難しい。というのも、我々の 2015 ～ 2018 年での発掘調査によれば、ドンゴイン・シレー遺跡は 8 世紀中葉の突厥時代の墓所もしくは祭祀遺跡であって、仏寺ではない。またその周辺域にある遺跡とすれば、イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡が第一に該当しそうである。しかし、2019 年の発掘調査において、このドブジョー遺跡から出土した獣骨による放射性炭素年代の分析からは、15 世紀中葉～ 17 世紀前半頃に建造されたことが示されており、永楽帝が遠征した 15 世紀初頭にはまだドブジョー遺跡は存在していなかったと見るべきである。また明の永楽軍は「古梵場」に一泊して翌日、出立したことを記すが、イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡は川中島の丘であり、そのような大軍が駐屯できる場所ではない。逆にドンゴイン・シレー遺跡はそれを含む広大な草原に位置しており、軍隊が宿営できる十分な広さがある。それ故、金幼孜のいう「古梵場」はイフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡ではなく、ドンゴイン・シレー遺跡を指していると見るのが妥当であろう。金幼孜はさしたる根拠なく、この祭祀場を仏寺遺跡の

痕跡と見なして「古梵場」と標記したと解釈できる。また「古梵場」の「古」という形容語から、この遺跡が当時､既に「かつて仏寺として使用された場所」の意と解され、彼が訪問した時、その建造物は機能せず、荒れた状態であったことを想起させる。このように解することが許されるならば、1402 年当時、彼のいう「古梵場」とはドンゴイン・シレー遺跡を指すこと、当時遺跡は既に破壊されていたことが窺える。そして我々の調査並びに放射性炭素年代分析によれば、本遺跡の石囲い付近からは 15 ～ 17 世紀のモンゴル時代の動物骨や石囲いの中央穴表面におかれた防御用の木製覆いなどの存在から見て、本遺跡が当時のモンゴル遊牧民から古代の墓所もしくは廟于として崇拝を集めていたこととみなせよう。事実、我々が 2013 年 5 月にここを訪れた際には、本遺跡はモンゴル時代の墳墓に見られる環形石積の様相を呈していたのであり、このこともモンゴル時代以降、この遺跡が「モンゴル化」されて、モンゴル人にとっての墓所もしくは先祖崇拝の祭祀遺跡として見なされていたといえよう。

ちなみにドンゴイン・シレー遺跡の調査状況の一部は、日本の国際交流基金の国際研究集会に関わる助成金によりモンゴル国のウランバートル・ホテルを会場に大阪大学とモンゴル考古学研究所が共催した「東部モンゴルにおける考古学研究と遺跡保護に関する国際シンポジウム」での報告 (2016 年 10 月 ) や、モンゴル考古学研究所から出版された簡報や、モンゴル語での調査経過報告書 [Tsogtbaatar *et al.* 2017; *id.* 2018]、また 2017 年 12 月に大阪大学中之島センターで実施された「モンゴル考古学のいま」と題する国際シンポジウム報告（報告集は未刊行)、山口欧志による三次元計測の報告 [ 山口 2021] などで公表している。

## Ⅴ．イフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡の試掘調査

当初、大澤は、2016 年までは、今回の調査対象とした方形の石壇からなるイフ・ボラギーン・ウンドゥル・ドブジョー遺跡がドンゴイン・シレー碑文遺跡のある高台から北に約 7 km 離れたデルゲルハーン山（オール）の西方に位置し、ドンゴイン・シレー遺跡をランドマークとして、デルゲルハーン山（オール）に向かう河沿いの行路からも近い場所にあることから、何らかの関連性が疑われること、その場合、時代的にもドンゴイン・シレー碑文が立てられた 8 世紀中葉の突厥支配下のモンゴル高原ではこうした定住遺跡が未だ見つかっていないことから、むしろ東ウイグル可汗時代の定住遺跡か、あるいはドンゴイン・シレー碑文遺跡からは突厥文字の石碑上に縦に契丹小文字が刻まれた碑文 2 点が見つかっていることから、本碑文群が少なくとも西暦 11 世紀までには破壊されず、立てられていたことから、ドブジョー遺跡も、契丹時代に関連する住居もしくは寺院遺跡かもしれないと推定した。というのも、本遺跡が位置する場所は、ドンゴイン・シレー遺跡の西側に位置する湖に流れ注ぐ河の下流にあり、1970 年代の社会主義時代に付近での地下資源の採掘事業で、湧水が出なくなってしまったという。また河は雨が降らない際には、それ以降、枯れ河となっているが、それ以前はかなりの水量があり、羊も渡ることが出来ないほど豊富な水量があったとの話を現地牧民から聞いている。本遺跡が現地の牧民から「河の」を意味する「ボラギーン」という形容語を付して呼ばれているように、もともと川中島の丘に建設されていたことに因む。遊牧生活という観点から見れば、ドンゴイン・シレーのある高台の草原が、夏営地として使用されていることに対して、北西のデルゲルハーン山（オール）に囲まれた場所は風よけの場所としての冬営地として使用され、その中間にあるドブジョー付近は、春営地もしくは秋営地として使用されてきたという。通常、草原では冬営地には定住遺跡が営まれることが多く、本場所にも、ウイグル時期以降の定住遺跡が建設された可能性があると推定された。こうした見通しの上に立って、われわれは、本遺跡を発掘することで古代ウイグルや契丹時代の新たな知見が得られる可能性があるとの見通しを、モンゴル側に提案し、共同調査を行うことを提案し、了承された。

そしてモンゴル考古学研究所と共同調査を行うべく、モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所と学術協定を締結後、2018 年からは国際共同研究加速基金 ( 国際共同研究強化 B)「東部モンゴル新発見の突厥・ウイグル期の定住遺跡に関する歴史・考古学的調査」(18KK0017) をうけて、調査を行うことになった。

しかし発掘にむかう途上、出くわしたモンゴル科学アカデミー考古学研究所のアマルトゥブシンは、

モンゴル国立大学の考古・人類学教室主催の調査グループ代表者である考古学者のエルデネバトからの情報を伝えてくれた。本遺跡の位置からちょうど反対の、デルゲルハーン山（オール）の東側に位置し、同様の石壇の構造をもつトゴーティン・ドブジョー遺跡はその出土遺物の放射性炭素年代分析によれば、17 世紀頃に年代づけられる仏寺との評価を得たという。となれば、我々の石壇遺跡も同様の時代になる可能性があり、ウイグル時代の遺跡の可能性は低いことが推定された。ただそうした場合でも、遊牧民は例えば、エルデニゾーなどの事例からも知られるように、寺や記念物などを建造する際には、前時代の遺跡を再利用することがしばしばあることから、新たな本遺跡の建造にも、前時代の遺構や遺物を再利用して、仏寺を建設した可能性もあると考え、その遺構の一部を掘り下げて発掘調査を進めていくことで再度、モンゴル側と協議し、その方向で調査を実施していった。

結果として、本遺跡の出土遺構や遺物からは石壇式の建造物の北面中央付近に祭壇をもつ中国製屋根瓦で覆われた仏寺があったことが明らかになった。先のトゴーティン・ゴリン・ドブジョー遺跡とも併せて、山口欧志とバトダライが 2016 年 9 月と 2017 年 9 月に行ったデルゲンルハーン山（オール）周辺での表面調査ならびにドローン空撮調査によって、デルゲルハーン山（オール）西方の川中島の丘からは本遺跡を含む石壇遺跡が 4 基ほど分布していることが判明した。そうした遺跡も規模はやや小ぶりではあるものの、同じタイプの石壇構造からなるという点からみて、仏寺もしくはそれに付随する祭祀遺構と推測され、ほぼ 15 世紀～ 17 世紀前半頃に編年されよう。モンゴル仏教史に詳しい大谷大学の松川節教授によれば、16 ～ 17 世紀頃の明末のモンゴル東部におけるこうした仏教寺院の建造に関する文献資料は管見では見当たらず、不明なことが多いという。例えば、ドルノド県のヘルレン河に近いバルス・ホト第 1 遺跡の東側にあり、モンゴル人考古学者の Kh. ペルレーの部分的発掘調査以後、モンゴルでは契丹時代の仏塔とされている建造物も、奈良大学とモンゴル考古学研究所の調査隊によれば、その柱に使用された材木からの放射性年代分析によれば 17 世紀に年代づけられている [ 正司・エンフトルほか 2019]。また本仏塔を表面調査した武田和哉氏によれば、この仏塔は中国国内の内蒙古や遼寧省などの契丹時代の仏塔に見られる八角形の形式を備えてはいるものの、その内部構造には内部に大きな空洞のある建築様式 ( 空芯型 ) となっている点、また塔の建築部材として木材が多用されており、それらが塼積の中に組み込まれるなどして、構造上重要な骨材として使用されている点は契丹時代に見られない様相であるという [ 武田 2021]。こうした状況を踏まえるならば、この仏塔も契丹時代よりも後代の、17 世紀当時に建造されたか、もしくはその時期に何らかの修復がなされた可能性が高く、今後新たなアプローチから精度の高い調査分析がなされる必要がある。

では、15 世紀中葉から 17 世紀までのモンゴル東部における仏教寺院の建設もしくは修復事業は何を意味しているのであろうか？ 今後の見通しとして、これらは当時のモンゴル仏教界における新たな潮流を反映するものであり、仏寺の建造を通して仏教復興運動を活発化し、現地の遊牧民に政治的影響力を及ぼすにいたった何らかの政治勢力が当地域に存在したことを念頭に断片的ではあるかもしれないが、周辺の岸壁銘文などの解読や関係史料を蒐集分析しながら、現地の政治勢力の実態を明らかにしてゆく努力が求められる。そうした上で、本遺跡を含む関連遺跡の発掘データを整理・分析しつつ、歴史学的観点からも、当地における政治動向をも視野に入れつつ、モンゴル東部における当時の宗教状況を復元・考察してゆく必要があろう。

以上、これまでの東部モンゴルにおける調査状況と本調査に至る経緯とその目的について概観した。以下は、本年度の調査の実施報告について、述べることとしよう。

**謝辞**：

2013 年以来、筆者のモンゴル調査に関係し様々な便宜と調査機会を与えてくださったモンゴル科学アカデミー考古学研究所のツェベーンドルジ氏 (Д. Цэвээндорж)、ツォグトバータル氏 (Б. Цогтбаатар)、ルンデフ氏 (Г. Лхүндэв) には衷心より感謝の意を申し添えたい。

**註**：

1) 三十日、至順安鎮。上立帳殿前、指營外諸山曰 :「此虜地諸山之入畫者。」遂令畫工圖之。晩下雨。五月初一日、早微雨發順安鎮。行十餘里、山多白雲、上召指示前山曰 :「此即名白雲山。」又行数里、

白雲中有青氣接地、望之如青山白雲。上曰：「此山甚高大可観。」幼孜以爲信然。上笑曰：「此氣也，非眞山。若誠爲山，則天下之山無有過之者。」度一岡，遥見臚朐河、又一岡。（明・金幼孜撰『北征録』巻 19 葉、欽定四庫全書提要古今説海所収）

**引用・参考文献：**

**＜日本語＞**


正司 哲朗・エンフトル A.・イシツェレン L. 2019「契丹 ( 遼 ) 時代の土城「バルス・ホト 1」に隣接する仏塔の修築前後の構造比較 」『奈良大学紀要』47, 奈良大学 : 147-158.

白石典之 2017「東部モンゴルの交通路から見たドンゴインシレー遺跡の立地風景」国際シンポジウム " モンゴル考古学のいま " 発表要旨 .

武田和哉 2021「モンゴル国ドルノド県ヘルレン・バルス・ホト I 遺跡所在塼積八角塔の踏査報告および一考察」,『モンゴル国立大学総合科学部・大谷大学真宗総合研究所共同研究プロジェクト「モンゴルにおける仏教の後期発展期 (13 世紀～ 17 世紀 ) 仏教寺院の考古学・歴史学・宗教学的研究」第 1 期 (2013 ～ 2015 年 ) 研究成果報告書』大谷大学真宗総合研究所・西蔵文献研究班 : 93-110.

森安孝夫・オチル A. [ 責任編集 ]1999『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研究会 .

山口欧志 2021「モンゴル国ドンゴイン・シレー遺跡の三次元記録」『金大考古』79 号 金沢大学人文学類考古学研究室 : 43-51.


**＜英語・モンゴル語＞**


Erdene-Ochir N-O., Bolorbat Ts., Lkhündev G.: Эрдэнэ-Очир Н., Болорбат Ц., Лхүндэв Г., 2017, “Донгойн Ширээ”-н Археологийн малтлага судалгааны шинэ үр дүнгээс, *Монголын зүүн бус нутгийн Археологийн судалгаа, хадгалт, хамгаалалт, (Олон улсын эрдэм шинжилгээний хурлын эмхэтгэл, Улаанбаатар хот, 2016. 09. 26-27.)*, УБ :249-256. [New Result of Archaeological Excavation at the "Dongoin Shiree" site, *Archeological Research and Preservation in Eastern Mongolia, (Proceedings of international conference, Ulaanbaatar, 2016. 09. 26-27.)*]

Mongolian academy of sciences, The yomiuri shinbun, 1991, *Gurvan gol: historic relic probe project, Initial year (1990)*, The Yomiuri shinbun, Japan.

Mongolian academy of sciences, The yomiuri shinbun, 1994, *Gurvan gol: historic relic probe project (1991-1993)*, The yomiuri shinbun, Japan.

Osawa Takashi: Осава Такаши, 2017, Монголын зүүн бус нутгийн “Донгйн Ширээ”ний дурсгалын түрэгийн түүх, археологийн судалгаанд эзлэх байр суурь, ач холбогдлын тухай, *Монголын зүүн бус нутгийн Археологийн судалгаа, хадгалт, хамгаалалт, (Олон улсын эрдэм шинжилгээний хурлын эмхэтгэл, Улаанбаатар хот, 2016. 09. 26-27.)*, УБ: 41-51. [The position and significance of the inscription and site of Dongoin shiree of the Eastern Mongolia in the Archaeological and Historical research histories of the Ancient Turkic period, *Archeological Research and Preservation in Eastern Mongolia, (Proceedings of international conference, Ulaanbaatar, 2016. 09. 26-27.)*]

Tsogtbaatar B., Erdene-Ochir N-O., 大澤孝 (Osawa Takashi) ,Lkhündev G. 齋藤茂雄 (Saito Shigeo) ,Batdalai B., Amarbold Ye., Airarardölröön G.: Цогтбаатар Б., Эрдэнэ-Очир Н-О., Осава Т., Лхүндэв Г., Сайто Ш., Батдалай Б., Амарболд Э., Аирарардөлрөөн Г., 2017, *"Донгойн Ширээ"-ний дурсгалын Археологийн Судалгаа*, УБ. [『ドンゴイン・シレー遺跡の考古学研究』]

Tsogtbaatar B., Erdene-Ochir N., Lkhündev G., 大澤孝 (Osawa Takashi) , Batdalai D., Angaragdölgöön G., Amarbold E.: Цогтбаатар Б., Эрдэнэ-Очир Н., Лхүндэв Г., Осава Т., Батдалай Д., Ангарагдөлгөөн, Амарболд Э., 2017, Монгол-Японы хамтарсан "Дорнод Монголын эртний түрэгийн үеийн түүх, археологийн судалгаа" төслийн 2016 оны малтлага судалгааны шинэ үр дүнгээс, *Монголын археологи-2016*, УБ: 228-234. [「蒙日共同 “ 東部モンゴルの古代テュルク時代の歴史・考古学研究 ” プロジェクト 2016 年発掘調査の新成果」『モンゴル考古学 2016』]

Tsogtbaatar B., Erdene-Ochir N., Lkhündev G., Osawa T., Batdalai D., Angaragdölgöön G., Amarbold E.: Цогтбаатар Б., Эрдэнэ-Очир Н., Лхүндэв Г., Осава Т., Батдалай Д., Ангарагдөлгөөн, Амарболд Э., 2018, "Дорнод Монголын эртний түрэгийн үеийн түүх, археологийн судалгаа" төслийн хүрээнд 2017 онд хийсэн ажлын тухай, *Монголын археологи-2018*, УБ: 124-128. [「蒙日共同 “ 東部モンゴルの古代テュルク時代の歴史・考古学研究 ” プロジェクトで 2017 年に実施した調査について」『モンゴル考古学 2017』]